海老毛横穴古墳群

園田　由紀子

はじめに

海老毛自治区と隣の上市自治区の境界線あたりの町道の山側に横穴墓群がある。横穴墓（オウケツボ、ヨコアナボ）とはおおむね古墳時代の後期に作られた墳墓の形式のひとつである。古墳では遺体を収める石室が構築されるが、横穴墓は石室を構築するかわりに山腹や台地の縁辺に横から穴を掘り窪めて墓室を作ったものである。

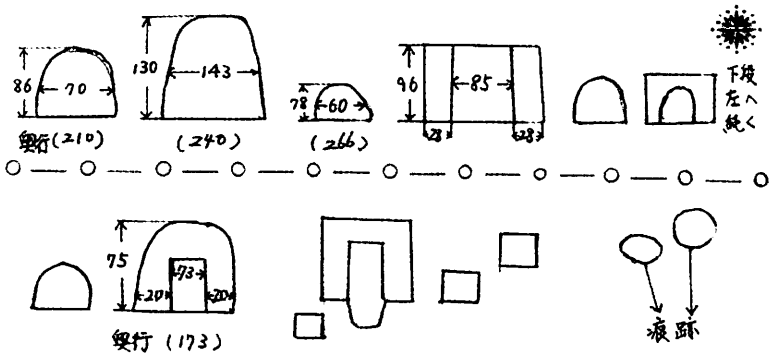
ここでは海老家自治区の横穴墓について、筆者自身が測量して調べた詳細を紹介する。さらに地域の中でどのような位置づけにあったのかを聞き取りの結果などから明らかにする。それとともに、そもそも横穴墓とはどのようなものであるか、考古学の研究書などから分かったことを記す。

一．海老毛横穴墓群について

横穴墓は、軟質の岩山やローム層台地などの中腹や麓に丘側から穴を掘りこんで作った一種の墓室である。構造的には中国の崖墓に類するが、朝鮮半島には横穴墓は存在しない。そのため、その系統をアジアのいずれの地域に確かめることができるか、論じることが難しい。日本の横穴墓は、横穴式石室の普及にともなって発生したものと考えられている。

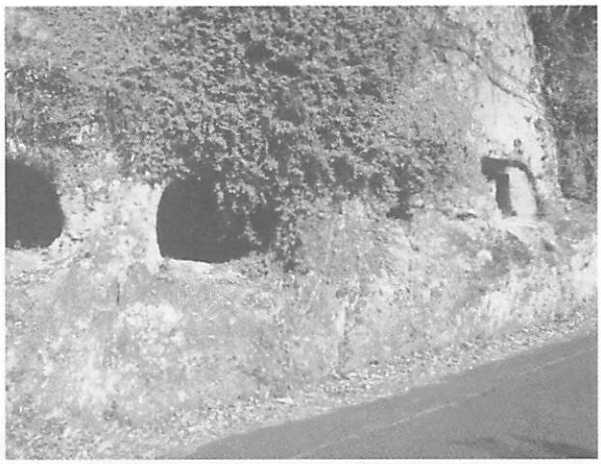
海老毛自治区の横穴墓群も崖に穿たれており、その崖の海抜はおよそ九十メートルである。横穴墓群の脇の町道より見下ろすと、底を削って垂直になっており、およそ四十メートル下に黒川の川底がある。挟間町教育委員会発行の『挟間町の文化財（挟間地区の文化財）』によると、この横穴墓は六世紀から七世紀の古墳時代後半に作られたもの、とある。

次の図は、筆者が海老毛横穴墓群を測量したものである。（測定値はおよその数値）



測量図（道に沿って東西に約78mの中に12個＋２個（穴の痕跡））（単位はcm）

横穴墓の様相



二、地域の中の横穴墓

海老毛地区横穴墓の脇にある町道は昭和三六年頃に改修・拡張されたものである。改修以前の道幅は、リヤカーや馬車、車力などが通れる程度の幅しかなかった。海老毛の当時の行政区域は由布川村であり、赤野自治区には由布川村役場や農協があった。このため海老毛－上市線（間の道）は国鉄を利用する時以外は使われていなかった。つまり昭和三六年以前まで、現在の町道には生活道路としての役割がほとんどなかった。そのため広い道路を必要としなかった。

しかし経済成長にともなって、道路拡張工事の必要性が高まり、工事が行われた。昭和三六年頃の町道改修・拡幅の際には、ダイナマイトを使用してカーブの頂点あたりにあったいくつかの横穴墓を破壊した。その工事には人夫（労力）として地域の人々が雇われた。

いつ頃からか、またどういう理由か、一基の横穴墓の前面に地蔵尊が二体置かれ、現在も置かれている。九十歳になる地域の古老に尋ねても、物心ついた頃からそこに置かれていたと言うのみである。

戦争中には防空壕として使われていた、戦後の一時期は家のない人が仮の住まいとして利用し、内部は煤けていて暖をとったり、食事を作ったりしていたのであろうという話がある。

三、横穴墓の名称の変遷

横穴墓という名称はなじみが薄いものである。明治十九（一八八六）年以来、研究者達の著書には、横穴、横穴古墳、横穴墓の順に名称が異なっている。これらの名称は使用する研究者の多寡や時代に起因するところであり、研究者それぞれの考え、意識に関わる。大体の傾向として左ページの表のように整理できる。

明治初期の考古学の草創期には、「横穴」が何のために構築されたものであるか、穴居（住居のこと）か、墓や埋葬用かを巡って論争が行われた。つまりこの時期は、遺構が墳墓かどうかまだ明らかではなく、横穴の名称は縦穴か横穴かということだけを表現しているのであり、「横穴」は横方向に「穿った穴」以上の意味を有するものではない。その後、明治三〇年代に「横穴」が墳墓であると確

名　称	使われた期間
横　穴	明治十九（1886）年　～　昭和三七（1962）年
横穴古墳	昭和三八（1963）年　～　昭和五四（1979）年
横穴墓	昭和五五（1980）年　～　現在

定した。しかし後も名称としてはそのまま使用され続けていた。

「横穴古墳」の名称も昭和三八年から昭和五四年の間と、かなり長く使用されてきた。古くは古墳時代の埋葬施設としての認識からの呼称であり、新しくは古墳時代の後期に群集墳の一類型として存在する様相をもってする名称であるが、ともに墳丘の有無が名称に関わったものではない。

昭和五五年、ニューサイエンス社の考古学ライブラリーの一冊として『横穴墓』が纏められた。この書籍では、「横穴墓」の大半が古墳時代後期に構築されたものであるとはいえ、古墳時代の墳墓がすべて墳丘をともなういわゆる「古墳」ではない、という見解がとられた。この時代に横穴古墳と呼べるものは墳丘を有し横穴も有する高塚古墳のみである。また明治初期から使用され続けていた「横穴」は、普通名詞として単に横に穿った穴を示すのみであり遺構の性格を表わすものではない、という認識も強まった。これらをもとに「横穴墓」としたのである。

四、被葬者の階層

古墳時代後期に作られ、横穴墓の性格を持っている最も有名なものは、大阪府にある高塚古墳であるが、これは一部の特権階級の人々を葬った、やや例外的な墳墓である。高塚古墳が作られた時代である古墳時代後期に、広く一般的に作られた横穴墓は、その大部分から貧弱な副葬品、例えば鉄製の斧、鋤先、鎌、金槌、錐といった農工具、掘削工具が出土している。このことから一般に横穴墓は高塚古墳の被葬者のやや下に続く階級の人々が葬られた墳墓と考えられる。しかし横穴墓の中には高塚古墳並みの副葬品が見られるものや、ひときわ立派な造りと見事な装飾を施した出土品も存在している。

横穴墓群のグルーピングは当時の社会構造や血縁関係の単位を示唆するものと推察されている。横穴墓はその構造から追葬し易いので、つまりは家族墓的な性格を持っていたり、祖先の霊を祀るような葬送儀礼が当時の社会に生み出されていたりしたことを証明する墓の形だと考えられる。

五、周辺地域の横穴墓

大分川と賀来川に挟まれた地域では、宗方小学校の西に小野鶴横穴墳墓群があり、小野鶴から植田への途中に大曽横穴墓群がある。木ノ上の上芹に所在する高来山（こうらいやま）横穴墓群では三十基以上の横穴墓が確認されており、その中の一基から珠文鏡（しゅもんきょう）、剣、鉄鏃（てつやじり）などの副葬品が発見されている。

おわりに

横穴墓を調べるに当たり、大分県内には第四期（約一六〇万年前から現在）の火山活動の痕跡が顕著に認められ、原始古代から今日までの人々の生活に大きく関わっていることも解った。中でも約七～八万年前とされる阿蘇山の「阿蘇4」火砕流は大分、熊本の両県はもとより、山口県、宮崎県、長崎県、福岡県の広範囲に認められる。この火砕流に起因する溶結凝灰岩の崖面は古墳時代の横穴墓や、さらには磨崖仏造顕の場を提供している。臼杵や国東の有名な磨崖仏と海老毛の横穴墓は、同じ火山性の加工し易い土壌があってこそ、大分県に存在するのだと分かった。

また数冊の考古学研究者の著書に接し、一四〇〇年前の世界を想像し、更に数万年前の火山活動に迄遡る、とてつもなく長いつながりに興奮してしまった。

海老毛の村人は昔からずっとこの横穴墓を「ためあな」と呼んでいる。これは「谷穴」から変化したものであろうと推察する。更に横穴墓に添った町道を硬い底の革靴等で歩く時、空ろな響きがする。四十メートル下の黒川迄の間に未だ発見されていない横穴墓が存在するのではないかと期待している。

参考資料

池上悟『日本の横穴墓』雄山閣、二〇〇〇年
池上悟『日本横穴墓の形成と展開』雄山閣、二〇〇四年
挟間町教育委員会編『挟間町の文化財　挟間地区』挟間町教育委員会、二〇〇〇年
森浩一企画、橘昌信著『日本の古代遺跡 49　大分』出版社、一九九五年